

故 松田達郎先生を悼む

元国立極地研究所長、国立極地研究所名誉教授、松田達郎先生は平成15年1月27日、78歳でご逝去されました。松田達郎先生のご業績、極地科学のご功績を紹介するには相応しくない若輩と知りながらも、松田先生の助手として昭和50年に国立極地研究所に着任して以来、南極陸上生物学の分野で、長きに亘るご指導の下で仕事をさせていただいたことから、僭越ながら、ここに先生のご功績を偲びつつ、紹介の拙文を綴らせていただく次第です。

松田先生は大正13年12月10日、鹿児島県加世田市にお生まれになり、昭和27年3月、東北大学理学部生物学科をご卒業後、東北大学理学部助手、昭和38年3月同助教授、同年8月、国立科学博物館第二研究部、極地課にご転任になりました。昭和40年5月、南極のコケ群落の生態学的研究により理学博士（東北大学）の学位を取得されました。その後、昭和48年9月に国立極地研究所設置にともない同所に配置換え、教授に昇任されました。同時に併せて同研究所資料主幹、昭和56年研究主幹、昭和59年には所長に就任され、昭和63年11月30日、任期満了により退職されました。平成元年3月には、国立極地研究所名誉教授の称号を贈られ、平成12年11月3日にはそれまでのご功績により勲三等旭日中綬賞を受賞されました。

先生は永年にわたって生態学の教育・研究に努められました。とくに、東北大学理学部において、害虫の振る舞いを群集生態学的に解析し、それらの成果を数多く発表されました。当時の指導者、加藤陸奥雄教授（後、東北大学長）は害虫学、動物生態学の泰斗であり、同教授の下で松田先生は耕作地における昆虫の行動を統計学的手法を用いて群集生態学的に解析されました。また、研究対象は単に害虫に留まらず、トビムシ、ショウジョウバエ、カの野外集団の解析からアメンボの行動、フジツボの生態など広い範囲の動物の研究を手がけられました。南極観測に参加されてからは、研究対象を日本の動物から極地の生物に移し、一貫して群集生態学的視点で研究を続けられました。昭和34年第4次南極地域観測隊夏隊として船上観測をしながら、初めて昭和基地に赴き、引き続き第5次観測隊に越冬隊員として参加されましたが、これは生物の研究者としては最初の越冬隊員でもありました。第6次観測隊夏隊により昭和基地は一時、閉鎖されましたが、昭和40年1月、松田先生は木崎甲子郎先生と共に旧ソ連ミルヌイ基地を経て、3年間無人であった昭和基地の状況を視察され、第7次観測隊の基地再開に備えられました。以上の経験をふまえ南極観測再開と発展の時代の中心的なメンバーのお一人として南極観測をリードされたのです。

第5次の越冬観測では学生時代から動物を研究対象としてこられた先生が、一転してコケ群落の生態学的研究をされました。気象学、統計学的な学問的基盤に立って、コケ群落の分布はその生育地の地形、風向、雪ドリフト、日射などの環境諸要因と強く関連していること、コケ群落内の温度を年間測定した結果、南極の厳しい環境下でも積雪下にある群落内は適度

な温度を保ち、コケの生存に致命的なダメージは受けないこと、さらに、コケ群落の断面の観察から、年周期を示すと考えられる縞が存在することを発見し、昭和基地周辺のコケ植物の年令は 100 年を越えるものであることを実証的に示されました。昭和 40 年 5 月には、これらの一連の南極のコケ群落の生態をとりまとめ、東北大学から理学博士の学位が授与されたことは前に触れたとおりです。その当時は国際的にも南極のコケ植物の研究は少なく、これらのコケ群落の構造と群落内外の微気象学的な研究は国外でも高く評価され、文字通り、極地の植物生態学の先駆的な研究を成し遂げられたのでした。南極においては、現場をじっくり観察することによって分野を越えた発想、新しい方法のアイデアが湧くことがあります。この論文は南極観測の初期に見事にその発想が結実した例でありましょう。また、コケ群落の研究だけでなく、ペンギンの繁殖個体群の調査をされ、昭和基地周辺でのアデリーペンギンの生活史を初めて明らかにされました。コケ植物の群落生態学の研究を進める傍ら、昭和基地では 3 種のダニを初めて発見、記載し、生態学研究に着手しました。さらに、第 11 次観測隊では観測隊長兼越冬隊長として、隊の運営の指揮をとられました。ロケット発射実験を成功裡に、また、みずほ観測拠点の設置なども成功に導かれました。

第 15、16 次観測隊で実施された「昭和基地周辺の生物相を中心とする環境科学総合研究」



ペンギンルッカリーにて（第 5 次越冬中-昭和 56 年）

は、地球化学、医学、生物学の3部門の共同で行われ、先生はこの総合研究の実質的な研究代表者として研究計画の推進発展に貢献されました。この総合研究を機に、昭和49年、昭和基地には環境科学棟が建設され、その後の環境科学の発展に寄与してきました。この研究成果は昭和51年の第1回南極環境科学シンポジウムに発表、昭和52年に論文集が出版され、国内外に高く評価されています。

3回の越冬観測を経験して、生態学の対象としては動物、植物を問わず、幅広い見地で研究を進めてこられた先生は、長年培われた群集生態学の知識を人間行動の解析にまで応用するというユニークな発想を展開されました。昭和36年以来、南極における人と生活を つぶさに観察されてきた先生は南極観測隊の行動を人間生態学、人類動態学という形でまとめられました。この人類動態学という学問は人間がさまざまな環境下で生活し、活動する上で生じる言葉、動作、情報交換、コミュニケーションなどの行動を集団の中でとらえていくといういわば行動学の一分野だと考えられています。その結果、南極観測を集団の動態と位置づけ、20編に及ぶ論文に纏め上げられました。先生のこれらの業績は単に南極観測に人類動態学を導入したことに留まらず、取り纏められた資料は、南極で閉鎖された集団での生活を余儀なくされている観測隊の生活改善、隊員構成の策定の上で有効な指針を提供していることが注目に値します。今日の南極観測、あるいは極域科学に人文科学的な分野が欠落しているという批判も出ている中で、松田先生が常々われわれに語っておられた南極観測の人類動態学的側面は、今改めて考え直してみると、極域科学を展開していく上での道標の一つだったのではないかと思います。しかし何よりも松田先生が人類動態学の話をする時のとても楽しそうで和やかな表情は、今でも忘れることができません。先生はまた、南極観測の当初から、隊員や研究所の職員から“ばあさん”という愛称で呼ばれ親しまれておられました。その風貌もさることながら、誰をもいつも暖かく受け入れて下さる上に、安心して頼れるしっかり者というイメージもあってのことだと思われまます。

これまでに紹介してきた学問的なご業績は先生が南極観測を実質的に運営していく立場にあった中で生み出されたものであり、その活力には驚かされるものがあります。前にも書いたように、国立極地研究所の資料主幹、研究主幹を歴任、昭和59年12月1日には所長に就任されました。しかしながら、先生は昭和50年5月に体調を崩され、長く入院されたことがありました。ご本人にとっては晩年までその病苦との闘いがあったと思われまます。その中での研究活動であったのです。最初の南極観測責任者会議の日本代表としてボルダールの会議に出席するなど、国立極地研究所の所長として南極観測、設営に関する重要事項の統括責任者の重責を全うしたばかりではなく、学術情報センター評議員、宇宙科学研究所評議員、岡崎国立共同研究機構生理学研究所評議員、日本学術会議南極研究連絡委員会委員を勤められました。学会関係では日本人類動態学会の会長を勤められた他、日本生態学会、日本動物学会の活動を行ってこられました。また、国際的には、国際学術連合会議南極研究科学委員会の

生物作業部会日本代表でもあり、外務省国際連合局の外務事務官という形で南極条約協議国会議に出席されました。

このように、先生は動物の群集生態学を出発点として、極地の生態学、人類動態学に至るまで幅広い分野に多大な功績を残され、かつ、南極観測の推進役としてもご活躍され、さらに多くの後継者を育てられました。これまで私たちを導いてこられた故松田達郎先生のご功績と業績を紹介し、また先生の生前のご活躍を偲び、先生の御霊に深甚の謝意を表するとともに、謹んでご冥福をお祈りいたします。

国立極地研究所資料主幹 神田啓史